

MAN STANDING
版

人間椅子
・めざめ・

原作…江戸川乱歩／上演台本…藤田ヒロシ

音楽「前説」

灯がつくと、舞台下手、本棚の前で本を読んでいるその男。

―前説―

その男 お時間となりました。

と、本で顔を隠し舞台中央へと移動する。

その男

本日は皆さまの前に、世にも不思議な体験を告白しようと、こうしてお集まり頂きました……とは申しましたものの、問題が一つございます。私は生れつき、世にも醜い容貌の持主でございます。また、たださえ醜い私の顔が、長い月日の不健康な生活の為に、二日目と見られぬ、ひどい姿になっているのを……皆様の前に晒そうものなら、必ずや皆様はその視覚に支配され、私の告白が少しも入って来ない事でしょう。そこで――

音楽が途切れ、

その男

本日は迷子の遊園地所属の俳優・さおりの身体を借りて創作物としてお見せする事に致します。ですがこれは私の告白です。これをどうか、はっきりと、お覚えておいて下さいませ。

と、顔を見せ、一頁めくり、

その男

私という男は、お化けのような顔をした、その上極く貧乏な、一職人に過ぎない私の現実を忘れて、身の程知らぬ、甘美な、贅沢な、種々様々の「夢」にあこがれていたのでございます。

本を閉じ、本棚へ戻す。

暗転。

○その男の工房

闇の中で、

その男

この膨らみ、この手触り……これもまた難しい注文でしたが、いつものように、注文通り、いいや、それ以上の仕上がりです。

薄っすらとその男の姿が浮かぶ。

この肘掛け、このクッション……こんなにも拘りの強い椅子を注文されるのだから、さぞ拘りの強い部屋に置かれるのだろう。

はっきりとその男の姿が見える。頭に布を被っている。

その男

部屋には絵画。それは有名作家の模造のではなく、新進気鋭の現代作家の本物で……床の絨毯は一見は特別な物には見え

ないが決して褪せることのない上質な仕事で織られた逸品で……椅子の前のテーブルは、これまた拘り抜いた機能美溢れる逸品、その上にはいつなん時も美しい花が活けてある。もちろん、その花瓶は下品な主張することなく、それでいて「これでない」と思わせる凛とした佇まいで、花を引き立てる。そうだ、そうに違いない。そして、その主は（息を深く吸う）

と、ドアを叩く音がする。

ゆっくりと腕を動かすその男。

……。

工房の扉に向かうその男。（上手奥の角）

その男
申し訳ございません、お待たせ致しました。はい。もちろん出来ております。お確かめ下さい。今回も難しい注文でしたが、いつものように、ご注文通り、いいや、それ以上の仕上がりではないかと……。ところで、前回にもお話しさせて頂いた件ですが……。それは重々承知の上でのお願いでございます。

本棚に置いてあった伝票取り、扉へ。

その男
これを見てはもらえませんか？原材料がこれだけ値上がっているのーええ、それは承知しておりますが、そうやって判で押したように「約束」とおっしゃりますが時勢がーですからー見て下さい。此処。肘掛けの細工を。

と、扉を離れ、

その男
細く、滑らかで、軽やかな曲線美。それでいて、腕をしつかりと支える安定感。これは注文以上の仕上がりだと自負しております。私の椅子は海外の一流のそれにだって決して劣りはーでしたら是非ー

と、扉へ戻り、

その男
自己満足?!いま、そうおっしゃいましたか？注文を越えるような仕上げは自己満足だと？自己満足以代金は払えないと？そうおっしゃるのですか？

ふらふらと灯の当たる場所に出てきながら

その男
あなただって商売なのは承知しておりますが、それは私が材料を仕入れて、工作して、注文の品を仕上げて成り立つ商売ではないですか。この時勢、何から何まで高騰して、このままでは材料を仕入れることだって出来やー

と、扉へ戻り、

その男
自分でやれ?! 私が注文主に直接値段交渉をしろと、そうおっしゃるのですか?

ふらふらと灯の当たる場所に出てきながら

その男
そんな事したら売れる物も売れはしない。それを百も承知で、よくそんな事を!

と、その刹那、我に振り返りに急ぎ戻り、

その男
申し訳ありません。「約束」通りでお願い致します。

と、頭を下げ、しばし沈黙。

勢いよく工房の中に戻ると、

その男
そして、その主は……きつと、こうでしょう。若くも有能な実

業家。知的で品があり、その見た目も……見た目も、実に整い、まるで映画スターのようなオーラが……。

と、かみ殺すように語り、やがて言葉が途切れる。

静寂の後、笑いとも溜息とも付かぬ息を吐き……頭に被っていた布で顔を覆い、それを自らの首に巻き付ける。締め付けようとするが、手が止まる。震え、

その男
確かにお前はいい腕をした職人だ。だから、余所には任せられない難しく、質の求められる仕事が回ってくる。なのに、それがどうだ! どれだけ汗を流し、苦心を重ね、椅子を造り上げても、見てみる! 暮らしは少しも上向かない。ぼろ屋の工房に身を潜めるような暮らしは何だ! こんな、うじ虫の様な暮らしの何処に、何の未練があると言うんだ!

うるさい! 黙れ!

と、締め付けようとするが、一層手が震える。

その男
確かにお前はいい腕をした職人だ。だから――
うるさい! だま――

と、言葉が途切れる。手の震えも止まり、

その男
確かにお前はいい腕をした職人だ。だから、余所には思い付かない仕掛けを施すなんてわけない事さ。なかに、失敗したならその時こそ死ねばいい。こんな暮らしは惜しくはないだろ? なかに、お前はいい腕をした職人だ。失敗などするものか。

と、布を首から外し、小さく丸める。

暗転。

闇の中で、

その男（声） 余りにも突飛だが、その突飛さゆえ誰も想像すらないだろう。椅子の中に潜んでいるなど……なあと、焦るな。此処はホテルのロビーだ。夜になれば人気も引き……わけないさ。

○ホテルのロビー

灯がつくと、黒い幕が床に敷かれている。

次第にそれがもぞもぞと蠢きやがて椅子の形になる。そして、そこから、その男が姿を見せる。

その男 恐れるな。客は日々入れ換わる。造作もないさ。それに、盗みが露呈したところで、まさか、だよ。ロビーのこの椅子が犯人だとは誰も思いもしないだろうよ。

と、椅子からその男が姿を見せ、舞台奥の灯の当たらない暗がりへと消える。

やがて、その男が手に盗品を持って戻ってくる。

その男 な、言った通りだろ？

と、椅子の中（幕）に戻ろうとするが、次の瞬間、奇妙な動きを見せる。

その男 これは何だ？！罪を犯した興奮か？金を手に入れた興奮か？

と、盗品を眺める。

その男 いや。

と、大袈裟に一つ首を振り、

その男 確かにお前はいい腕をした職人だ。だから、この椅子もーこの椅子こそ最上の座り心地でなければならんだ。

少女の気配。笑い。

幕にその身を委ね、弾んでいるかのような動きを見せる。

その男 声音によれば、まだうら若い異国の乙女。しなやかな肉体、その全ての重みを俺に委ね、バタバタと、網の中の魚の様に、ピチピチと、はね廻る。

と、幕の中にその身が沈んでゆく。

幕の中で（その男として）先ほどの少女の動きを支え、跳ね返していたかのような動きを見せる。「おっ」「あっ」「うっ」といった声が漏れる。

少女の笑い声。

静寂―次の瞬間、奇怪な声を挙げ、幕を纏ったままのその男が奇妙で激しい動きを見せ、手足が突っ張った状態で固まる。それがゆっくりとかすかに動き始めると、

その男
確かにお前はいい腕をした職人だ。だが、もう職人ではない！それは窃盗という罪を犯したからではない。

と、次の瞬間、大きく動き、

その男
そうだ！ノミもカンナも釘も塗料も俺にはもう必要ないのだ！それらで造る椅子も、それに座って巡らす妄想も―嗚呼、何て陳腐だ！金さえも陳腐だ。そうだ、そうだ！椅子の中。この世界こそが俺のいるべき世界だったのだ。醜いと蔑まれてきた容姿に卑屈になり、交わるどころか、近づく事も、直視する事も出来なかった存在と、なめた皮一枚隔て、肌のぬくみを感じる程も、密接している！抱きしめる事も、首筋に接吻する事も出来る。

と、自ら口にして悶絶する。

次の瞬間、手足が突っ張った状態で固まる。

その男
これは何だ？！職人と言う身分を捨てた興奮か？新たな秘密を手に入れた興奮か？

もしや。

と、身体をねじり、

その男
もしや、もしや。

と、身体を逆にねじり、

その男
これが、恋？！

音楽「これが恋」

その男
まる裸の肉体と、声音と、匂とがあるばかりの、椅子の中の恋！暗闇の中の、秘密の、愛欲！

と、幕を相手に踊る。

暗転。

音楽が消え、闇の中で、

その男
とは言え、決して異様なわけでも、奇怪なわけでもないはずだ。この世の、人目につかぬ隅々では、様々に異形な、恐ろしい事

柄が、行われているのだ。俺だけが異形であるはずがないのだ！

○ホテルのロビー

灯がつくと、上手に「椅子」。それが崩れ、その男が姿を見せ、

その男

無論、始めの予定では盗みの目的を果しさえすれば、すぐにもホテルを逃げ出すつもりでいたが……

当に窃盗などは二の次だが、排せつ物の処理や食事、それらと同じと言えばよいのか、それらのついでと言えばよいのか、数ヶ月という、長い月日を、こうして少しも見つからず、椅子の中に暮しているというのは、我ながら実に驚くことで、それは此処が俺にとっての永住の地である証で……

無論、椅子に座る全ての人物が、恋の相手になるわけではない、がだからと言って「ツマラナイ」なんて事が椅子の中にあるはずもなく……

下手へと消えてゆく。

その男

いっこうに出口の見えない例の紛争への協力を得るため来日した大使が宿泊すると、従業員の噂話によって知ってはいたが、その様な人物が俺の膝の上にいるとはっ！

灯が絞られ、一点だけが明るくなり、その男が姿を見せる。

その男

俺は思った。今の俺ならば、その彼の心臓にナイフを突き刺す事が出来る。

と、突き出した腕に灯が当たる。

その男

この世界には幾つもの正義が存在するが、貧しき者、弱き者、苦悩と共に日々を繋ぐ者に容赦がない。どの正義もその者たちの悲鳴を喰らって肥えてゆく。ならば、あらゆる正義を殺し殺し、この世界を混沌の闇へと落す……そんな大事件が、俺の一挙手によって、易々と実現出来るのだ！これが興奮せずにはいられようかっ！

ゆっくりと灯の中に身体も入ってくる。

その男

椅子の中。なめした皮一枚隔て、この世の悦びとも、終わりとも繋がっている。その興奮の中に、俺は、いる。

と、不気味に笑い出す。

その男

しかし、何と言う事か！この俺は何処までも呪われていると言

う事なのか！このホテルが売りに出されるとは、俺が競売にか
けられるとは……。

言葉が途切れ、灯から外れる。

恐れる事はない。なあに金ならある。盗んだ物だが、金は金だ。
容姿は変らなくとも、金の有る無しで、その見え方は変って
くる事を知ってはいる。ならば悪くない選択だ。とは言え、それ
は、最上ではないっ！

と、再び灯の中に入ると、次第に辺りもあかるくなってゆく。

その男

競売？いいじゃないか、面白いっ！かつての俺はいい腕をした
職人だった。その職人が造った椅子だ。少しばかり古びたこ
ろで、人目を引き、買手は付くに決まっている。何処の誰が
俺を待っている？拝金主義者の邸宅か？三ツ星のレストラン
か？会員制のサロンか？次もホテルか？行き先がわからない
と言うのも面白いっ！何処でも構いわしない。例えそれが小
さな劇場だとしても、椅子には人間が座る。それも決まって無防
備に。なめした皮一枚隔て、愛する事も殺す事も出来る。職人
ではなくなったが、いい腕は健在だ。俺を壊すか、この世を壊
すか、いずれは選ぶ事になるだろうが、今はまだその時ではな
い。今はまだ、この興奮を楽しむ時だ。そう、人間椅子になっ
て。

と、灯から外れてゆく。

暗転。

音楽「後説」

—後説—

舞台下手、本棚の前で本を読んでいるその男。

その男

そうしてホテルから運び出された後、私は二・三日の間、道具
屋の店先に置かれ……いえ、それはまたの機会と致しましょう。
本日は此処までということだ。

音楽が消え、

嗚呼、最後にもう一度。本日は迷子の遊園地所属の俳優・さお
りの身体を借りて創作物としてお見せしましたが、これは私の
告白でございます——ええ、わかります。人間が椅子の中になど
……全くの創作物だと——ええ、わかります。それが常識と言
うもの。さて、どうですか？皆さんはその常識というもので、こ
の世を見渡せるとお考えでしょうか？もしそうお考えなのだ

としたら、それは私よりもずっと狭い場所に閉じ籠っている、
そういう事……？

一瞬の静寂

前説者
では、いずれまた何処かで。

暗転。

FIN

原作『人間椅子』江戸川乱歩（1925年）

無断での転用・転載、再配布、上演禁止